

報恩寺の角度

展覧会

会場：報恩寺

2019

11/16(土)～12/8(日)

報恩寺：

602 0066

京都府京都市上京区

小川町寺之内射場

579



誕生仏は右手を天に向けてあげているが、その角度はさまざまである。釈迦が誕生したとき、月は天頂に対してどのような角度にあったろうか。その月は、約46億年前、ティアと呼ばれる火星ほどの原始惑星が原始地球に斜めに激突して生まれたといわれる。それはどんな角度だったのだろうか。すべての存在の起源に偶然の角度がある。

信仰の空間も複雑で豊かな角度のネットワークで織りなされている。如来像と脇侍の角度、仁王尊像の四肢の角度、合掌する信者の手の角度、見上げることと見下ろすこと…。

報恩寺の寺宝「鳴虎図」のくねる虎の尾と蛇行する水流。二羽のカササギの嘴の延長線は二本の松の分かれ目で交わり、虎の背に導かれた視線は起伏をたどって舌の先から水流に落ちる。変化する角度の連鎖が絵に息吹を与える。

報恩寺は、その信仰の空間や数々の名宝だけでなく、寺の日常を支えるさまざまな事物や風景もまた、こうした精妙な角度の戯れに富んでいる。角度に宿るのは、人、モノ、光、重力、空間と時間の偶発的であり必然的でもある関係である。その関係は、見る位置や方向によって現われたり隠れたりする。見る人もまた身体ごと角度の織物に織り込まれているからだ。

報恩寺の時空は、何よりも「見ること」に関わる術としての美術の本地に立ち返ることをわたしたちに要請する。「見ること」を促し、存在の偶然と必然に触れさせてくれるのは、何よりも角度である。

井上明彦・

今村源・

日下部一司・

三嶽伊紗

DENKITOMBO

開催期間：11/16(土)～12/8(日) 開館時間：10:00～16:00

拝観料：¥800(小学生以下無料)

休館日：11/23(土)、12/1(日)、その他不定期

休館日は「まるごと美術館 運営委員会」にお問合せください。

お問合せ先：まるごと美術館 運営委員会

TEL: 050 5372 4935 FAX: 075 320 2887

MAIL: marugotobijutsukan@gmail.com

 まるごと美術館
KYOTO MARUGOTO MUSEUM

報恩寺の角度

11月16日(土) — 12月8日(日)

開催期間: 11/16(土) — 12/8(日) 開館時間: 10:00 — 16:00

会場: 報恩寺 拝観料: ¥800(小学生以下無料)

休館日: 11/23(土)、12/1(日)、その他不定期

休館日は「まるごと美術館 運営委員会」にお問合せください。

京都の10会場の寺社仏閣を期間限定の美術館に変える『まるごと美術館』。その会場の一つ、通称“鳴虎”で有名な報恩寺にて美術展を開催します。出品作家は、長きにわたり現代美術のフィールドで活躍してきた井上明彦・今村源・日下部一司・三嶽伊紗ら4人のユニット、各地にて野心的な映像プロジェクトを続けるDENKITOMBO(SCP)の2組です。

悠久の歴史を持ち、価値ある仏教美術を抱え持つ寺社という信仰空間は、新しく現代の美術を展示するために機能し得るのでしょうか?この根本的な問いを意識しつつ、本展はあえて美術として、作品として“配置しない”風変わりな展覧会が計画されています。作家たち自身によって『報恩寺の角度』と名付けられた本展に、驚かされ、意表を突かれ、そしてこの試みは、寺社空間に対する新しい発見の連続となるに違いないでしょう。みなさまのご来場をお待ちしています。

キュレーション: DENKITOMBO

お問合せ先:

まるごと美術館

運営委員会

TEL: 050 5372 4935

FAX: 075 320 2887

MAIL:

marugotobjutsukan@gmail.com



地下鉄烏丸線「今出川」駅、「鞍馬口」駅下車、西へ徒歩15分
JR「京都駅」より市バス⑨系統乗車、「堀川寺之内」下車 徒歩3分
阪急「大宮駅」より市バス⑨・⑫系統乗車、「堀川寺之内」下車 徒歩3分
地下鉄東西線「二条城前駅」より市バス⑨・⑫系統乗車、
「堀川寺之内」下車 徒歩3分

井上明彦・今村源・日下部一司・三嶽伊紗

- 2007 『八つの課題』 Gallery Yamaguchi kunst-bau (大阪)
- 2015 『散歩の条件』 ギャラリーすずき(京都)
- 2018 『おもかげおこしふくわらひ』アートメッセンジャー in 徳島
／徳島県立近代美術館ギャラリー
- 2019 『おもかげおこしふくわらひ』アートメッセンジャー in 徳島
／art space co-jin(京都)

井上明彦

INOUE, Akihiko

1955年大阪市生まれ。1990年代半ばより、水、重力、地面、屋根など人間の生存の基本的前提となるものに対して、絵や立体、インスタレーション、アートプロジェクトなどさまざまな方法で関わることを続けている。2015年『still moving』元崇仁小学校ほか(京都)、2016年『新シク開イタ地』神戸アートビレッジセンター、2016年『フクシマ美術』KUNST ARZT(京都)、2018年『複数形の世界のはじまりに』東京都美術館、2019年『発酵をよむ—藤枝守・井上明彦・稲垣智子—』+1 art(大阪)など

今村源

IMAMURA, Hajime

1957年大阪生まれ。1980年代半ばより、ボール紙、発泡スチロール、石膏、針金など軽い素材を用いて制作を開始、日常品に少し手を加えた作品、キノコの興味を展開したものなどに加え、場所と関わりを持つ大規模な制作も手がける。近年“私”について考える制作を継続中。2017年『東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」』京都芸術センター(京都)。2018年『パラパラ』ART ZONE(京都)、『起点としての80年代』金沢21世紀美術館・高松市立美術館・静岡市立美術館など。

日下部一司

KUSAKABE, Kazushi

1953年岐阜県生まれ。日常生活を通しての視点や対象となる物のあり方から、視覚的作用と認識(捉え方)の問題に触れる作品を制作してきた。版画や写真・経年劣化した素材による立体作品等、様々な媒体と手法を用いて発表を続けている。2016年『アートと考古学展「物の声を、土の声を聴け」』京都市文化博物館(京都)、2017年『5人の現代アーティストによる古典技法作品のセッション展』Monochrome Gallery RAIN(東京)、『INTRACTION OF COLOR「色の相互作用」』Gallery Yamaguchi kunst-bau(大阪)、2019年『色面』SAI GALLERY(大阪)など。

三嶽伊紗

MITAKE, Isa

1956年高知生まれ。1980年代よりモノをつかい、その輪郭線を曖昧にする制作を続けてきた。10年ほど前より、モノから離れ、時間軸のない眠りの中の夢を見たいと、映像作品の制作もはじめる。2014年『三嶽伊紗のしごと—みているもののむこう』徳島県立近代美術館、2015年『縄文と現代(白い、白い遠望)』京都造形芸術大学芸術館、2019年『みえるもののむこう』神奈川県立近代美術館 葉山、その他『俳句×美術 in 篠山 2016』、『俳句×美術 2019』など。

DENKITOMBO

DENKITOMBOは、2007年より映像プロジェクトやミクストメディア・インスタレーションを発表してきた「新視角」と「circle side」の融合体から発展した法人組織「電気蜻蛉」の別名アーティスト・ユニオン。映像に関わるプロジェクトのクリエイション、プロデュース、キュレーションなど境界のない幅広い活動を続けている。参加メンバーによって“SCP”を名乗ることも多い。2016年『藝倉美術館開幕展』(上海)、2019年『IFA国際美術協会展 2019』大阪市立美術館、2019年『未景2019 —御寺ART元年—』御寺泉涌寺(京都)、2019年『俳句×美術 / 伊賀上野 2019』国史跡・旧崇徳堂(三重)、2019年『ちかくのたび』ボードレスアートミュージアム NO-MA(滋賀)。